

2012年12月24日

第3008号

週刊(毎週月曜日発行)
購読料1部100円(税込)1年5000円(送料、税込)
発行=株式会社医学書院
〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23
TEL (03) 3817-5694 FAX (03) 3815-7850
E-mail: shinbun@igaku-shoin.co.jp
JCOPY (社団法人著作権管理機構 委託出版物)

New Medical World Weekly

週刊 医学界新聞

医学書院 www.igaku-shoin.co.jp

今週の主な内容

- 第7回医療の質・安全学会……1面
[連載]続・アメリカ医療の光と影/臨床・教育現場における利益相反を考える……2面
[寄稿]近代医学の145年(泉孝英)……3面
MEDICAL LIBRARY……4面
本紙通常号・レジデント号索引……5面
2012年医学書院発行書一覧……6-7面

「医療の質」「患者安全」学の確立を

第7回医療の質・安全学会開催

第7回医療の質・安全学会が11月23-24日、飯塚悦功会長(東大大学院)のもと大宮ソニックシティ(さいたま市)で開催された。今回の主題は「医療質安全学の確立——社会技術としての医療の基盤構築」。社会技術としての医療を具現化するための知識体系の構築をめざした演題が並んだ。本紙では、電子カルテとがん医療、2つの質評価に関するセッションのもようを報告する。

医療の質向上に寄与できる電子カルテとは

電子カルテの導入は進む一方、医療情報システム自体が新たな医療事故発生の原因となっているという指摘もある。シンポジウム「電子カルテと医療の質」(座長=滋慶医療科学大学院大・武田裕氏)では、医療の質向上の観点から今後の電子カルテの在るべき形について議論が行われた。

松村泰志氏(阪大)は、国立大学附属の42病院における診療記録の電子化と医療安全に関する調査結果を述べた。禁忌・アレルギー情報の集約や、指示の実施面では電子カルテによるシステム化が効果的だった一方、指示変更があった場合は紙カルテ運用のほうが優れていたという。診療記録の時系列表示は電子カルテでも不十分だったことから、医療安全により寄与できるシステムの構築を呼びかけた。

続いて指定討論として、徳永英吉氏(上尾中央総合病院)が市中病院の立場から発言。グループ病院間、病棟間の用語を標準化し、院内業務を可視化したいという思いが電子カルテ導入のきっかけだったことを明かし、グループ27病院すべてで同じシステムを採用したという。運用面では、カスタマイズしないことを現場にお願いしているとした。

●次週休刊のお知らせ

次週、12月31日付の本紙は休刊とさせていただきます。明年も引き続きご愛読のほど、なにとぞよろしくお願ひ申し上げます。(「週刊医学界新聞」編集室)

楠岡英雄氏(国立病院機構大阪医療センター)は、医療機能評価機構認定病院におけるIT関連インシデント分析に関する活動を紹介した。同機構認定病院患者安全推進協議会のIT化・情報機器部会では、病院情報システムに関連する患者安全の指針策定を目標に、IT関連トラブルの収集・分析を行っている。トラブルでは、オーダー伝達エラーや入力時の誤りなど、システムを運用する部分で発生したインシデントが多かったと分析した。

最後に登壇した座長の武田氏は、米国で展開されている「meaningful HER(電子カルテの意味ある利用)」プロジェクトを基に、日本の電子カルテの在り方を問題提起。施設利用が中心の日本の電子カルテは、医療の効率化が主目的となっている一方、米国では公衆衛生関連データの報告に助成があり、臨床プロセスと患者アウトカムの質向上につなげていることから、日本でも社会・技術システムとしての医療IT文化構築を訴えた。

QIでがん医療を評価

医療の評価指標を標準化や質改善に活かす取り組みが活発になりつつある。ワークショップ「がん医療の質評価指標(Quality Indicator)の現状と問題点」(座長=国立がん研究センター・若尾文彦氏、東大大学院・水流聡子氏)では、がん医療における質評価指標(QI)研究の現状が報告された。

佐伯俊昭氏(埼玉医大)は、QIを活用した「吐吐薬適正使用ガイドライン」の改訂作業を解説した。国際的な研究班AGREEのチェックリストに基づき、

ガイドラインの医療現場での浸透率や遵守率を調査。エビデンス・プラクティス・ギャップを明らかにし、現在改訂版の作成を進めていると報告した。

東尚弘氏(東大大学院)は、施設や地域ごとの標準治療の実施状況を明らかにするため、診療録からがん診療の治療項目の実施率評価を行っている。本評価法の問題点として、診療連携により治療の一部を他院で行うと実施率が下がる点や、標準診療を行わなければ正当な理由があっても評価されない点を挙げ、そうした弱点克服の検討を進める方針を掲げた。

QIを用いたがん医療の均てん化の評価を紹介したのは岡村健氏(国立病院機構九州がんセンター)。全施設がQI実施率80%以上を「均てん化」と定義し、国立病院機構のがん診療連携拠点病院38施設のうち15施設を対象に調査したところ、「均てん化した」と評価されたQI項目は各臓器とも20%以下と低かったものの、乳がん・肺がんでは治療関連の項目で均てん化の進展を確認できたとした。

続いて水流氏が、自身が開発したがん診療プロセスのQIについて紹介した。6つのがん診療のフェーズ(がん診断・治療前診断・治療計画立案・治



●飯塚悦功会長

療介入・腫瘍評価・経過観察)と、4つの観点(状態認識・計画・実施・アウトカム)を組み合わせた24の評価項目群を設定し、群ごとにQIを導出。パイロット調査では、病院間の診療プロセスの違いや改善すべき部分を評価できたことから、本手法を臨床での行動変容を促せる評価手法と位置付けた。

中山健夫氏(京大大学院)は、診療ガイドラインを活用したQI開発について言及した。時間の有効活用や資源の節約の上でも診療ガイドラインの項目はQIの重要な候補となることから、ガイドラインの作成委員にはQIへの展開や臨床現場で実際に用いられることを想定したガイドラインづくりを要望した。

最後に指定発言として、がん患者の立場から松本陽子氏(NPO法人愛媛がんサポートおれんじの会)が登壇。患者QOLの視点を欠いた標準治療もあることから、QIが病と共に生きる患者の支えとなることを望むとともに、どこに住んでいても質の高い医療が受けられる体制の構築を訴えた。

新しい医療のかたち賞に『幻聴妄想かるた』

第6回「新しい医療のかたち」賞授賞式が同学会閉会式上で開催され、患者を中心とした取り組み部門に『幻聴妄想かるた』(医学書院)の作成に当たった「NPO法人やっこハーモニー」が選ばれた。

選考委員長の大熊由紀子氏(国際医療福祉大)は、従来、医療者は聞き流すべきものとされていた精神疾患患者の幻聴や妄想を共有した点が画期的と『幻聴妄想かるた』を評価。かるたの作成者である当事者からは「かるたを通して、当事者がどういう気持ちで、どういう症状があるかを知ってほしい」との声が聞かれた。

このほか、医療者・医療機関を中心とした取り組み部門に「暮らしの保健室」が、地域社会の取り組み部門に「三方よし研究会」が選ばれた。



●授賞式のもよう

そのトラブルには理由がある

医療事故の舞台裏

25のケースから学ぶ日常診療の心得

長野展久 東京海上日動メディカルサービス医療本部長

保険会社顧問医である著者が、実際の医療紛争事例を臨場感溢れるドキュメンタリー風のケースストーリーにアレンジし、なぜトラブルに至ったのかを丁寧に解説する。医療紛争の具体的な再発予防策も提示。臨床医であれば誰でも遭遇しそうなケース25話を掲載した。難解な法律用語の解説コラムも充実。好評を博した総合診療誌『JIM』、内科総合誌『medicina』での連載をもとに、全面書き換え・書き下ろしを加え書籍化。



●A5 頁272 2012年 定価2,625円(本体2,500円+税5%) ISBN978-4-260-01663-6

医学書院

これが本物の幻聴妄想の世界だ!!

幻聴妄想かるた

編著 ハーモニー (就労継続支援B型事業所)

解説冊子 + CD『市原悦子の読み札音声』 + DVD『幻聴妄想かるたが生まれた場所』付

東京・世田谷のハーモニー(就労継続支援B型事業所)が、自分たちの幻聴妄想の実態をかるたにした。彼らの幻聴妄想の世界を知ることは、共存の意味を学ぶことである。解説冊子と、DVD『幻聴妄想かるたが生まれた場所』に加えて、女優の市原悦子さんによる『読み札音声』CDが付録になった豪華版。

こんなふうに使ってください

- *医療者——心理教育のツールとして。地域で暮らすイメージをつくり、退院支援のきっかけに。
*教育者——精神看護学実習の教材として。
*当事者・家族——幻聴妄想をどう話すか、どう聞か、どう解決するかの参考に。
*作業所——ユニークで、注目を浴びる商品開発の参考に。



●かるた92枚+(解説冊子)B6 頁120 2011年 定価2,415円(本体2,300円+税5%) ISBN978-4-260-01485-4

続・アメリカ医療の光と影

第236回

「最先端」医療費抑制策 マサチューセッツ州の試み⑥

李 啓亮 医師/作家(在ボストン)

前回までのあらすじ:「パートナーズ社が州全体の医療費を押し上げている」と批判したボストン・グローブ紙のキャンペーンは、マサチューセッツ州における診療報酬制度改革の動きを加速した。

2008年末に始まったボストン・グローブ紙の反パートナーズ・キャンペーンに歩調を合わせるかのように、「自前」の診療報酬制度改革を推進することで「出来高払い」との決別を図ったのが、州最大の保険会社、ブルークロス・ブルーシールド(以下、ブルークロス)社だった。2009年以降、病院・医師グループとの契約更新交渉に際して、同社が「Alternative Quality Contract(新クオリティ契約、以下AQC)」と呼ぶ、新たな診療報酬支払い方式を受け入れるよう要求し始めたのである。

州最大の保険会社による 新契約受け入れ要求

単純にいうと、AQCは、「人頭割り(capitation)」の支払い方式に、「質に対する報奨制度(pay for performance、以下P4P)」を組み合わせたものである。「人頭割り」は、実際に行われた診療行為の多寡・内容と関係なく患者一人当たり定額の診療報酬を支払う仕組みであるが、予算をオーバーして診療行為が行われた場合、サービス提供側がその赤字をかぶる「財政的リスク」を負わなければならない。逆に出費を減らせば減らすほど黒字が増えるのであるが、90年代、いわゆる「マネジドケア」が席卷した時代に、「サービス提供側にコスト抑制のインセンティブを与える決め手」として米医療界に普及した。しかし、供給側が過剰なコスト抑制(=利潤追求)をめざした場合医療の質が損なわれる危険があった上、単価があまりにも低く設定されたこともあって「赤字」となるプロバイダが続出、急速に人気を失った。当時の不人気を反映

しているのか、最近では、「capitation」ではなく、「global payment」と呼ばれることが多くなっている(註1)。

一方、「提供される医療の質の良し悪しに応じてサービス提供者に支払う診療報酬の額に差をつける」P4Pの運動がさかんになったのは、2000年代に入ってからである。規模が大きいものとしては、カリフォルニア州Integrated Healthcare Associationが同州の開業医グループ(医師数約3万5000人)を対象に2003年以降実施しているP4Pが有名であるが、プロバイダに対して質を向上させるインセンティブを与えることが確実である一方で、コスト抑制に対する効果については疑問視されている。

ブルークロス社のAQCは、global paymentとP4Pの両者を組み合わせることでそれぞれの欠点を補完しあうことをねらったのであるが、旧来の出来高払いの契約からAQCに変更するよう強く求めた同社の要求にプロバイダが次々に屈服、マサチューセッツ州医療界におけるコスト抑制の動きはさらに加速した。他の保険会社も追随して質の計測と連動したglobal paymentを採用するようになっただけでなく、2011年10月には、ちょっと前まで強大な価格交渉力に物を言わせて保険会社をねじ伏せてきたパートナーズ社もAQCを受け入れるまでになったのだ。

オバマの医療制度改革へと波及

ここで少し言及すると、オバマ政権が2010年3月に成立させた医療制度改革法では、メディケアにおける新たな医療サービス供給体制「Accountable Care Organization(ACO)」を創設することが謳われた。ACOにおいても「節約すると収入が増える」インセンティブとP4Pが組み合わされており、そういう意味ではブルークロス社のAQCと非常に類似した仕組みとなっている(註2)。ちなみに、ACOの名は、「患者に提供される医療について、質

臨床・教育現場における利益相反を考える

「医師と製薬企業の日常臨床、医学教育における適切な関係を考える」シンポジウムが12月8日、立教大(東京都豊島区)にて開催された。本シンポジウムは、2011年度文科研「医学生・研修医と製薬企業との関係に関する調査研究」研究班が主催するもの。冒頭、研究代表者の宮田靖志氏(北大病院)より、医学研究における利益相反(COI)については行政や複数の学術団体からガイドラインが示されるなど自主規制の意識が高まっている



●シンポジウムのもよう

が、臨床・医学教育におけるCOIの議論はまだまだ十分でないことが明らかにされた。

続いて三氏の講演が行われ、まず「EBMの暗黒面」を南郷栄秀氏(東京北社会保険病院)が指摘。EBMという言葉が浸透し「エビデンスがあること」が医師の治療選択・処方行動に大きく影響するようになった一方、特定の薬や治療法の有効性を強調するため、エビデンスが恣意的に操作される可能性があることと懸念を示した。また専門職としての医師の立場を自覚し、患者のために何が有用か自ら考える姿勢が大切と語った。

日本製薬工業協会(JPMA)からは森田美博氏が登壇した。製薬企業70社が加盟するJPMAでは、昨年「企業活動と医療機関等の関係の透明性ガイドライン」を公表。会員各社が「透明性に関する指針」を策定するとともに、医療機関等への資金提供について、2012年度分からの公開を決めた(2013年度開始)。氏は、製薬分野への社会からの信頼をより一層高めるべく、ガイドラインの周知に努めたいと抱負を述べた。

メディアの立場からは北澤京子氏(日経BP社)が、米NPO「Propublica」による資金提供データベースや、利益相反、過剰な疾病啓発などの視点から健康・医療関連報道を評価するウェブサイト「Health News Review」を紹介。メディアは、取材対象である専門家のCOIについてより積極的に調査・公表すべきとする一方、中立的・独立的な報道の在り方を検討する必要性も示唆した。

後半のフロア討論(司会=立教大/日本医学教育学会・大生定義氏)では、さまざまな立場から率直な意見が相次いだ。地方の医師からは「製薬企業のサポートなしには、研究会などの開催が難しい」実情が語られ、企業側からは「販促によって薬の正しい情報を広く伝えられ、より多くの患者さんを救える」という思いも聞かれた。一方若手医師から「学生時代にCOIについて知る機会がない」との訴え、教育者から「手本となる上級医がプロフェッショナリズムを意識し、ふさわしい行動を心掛けるべき」という声も上がった。さらに「販促活動費をまとめてプールする仕組みを作り、費用の拠出もそこから行っては」という提案もなされた。

最後に大生氏より「日本の医療風土に即したCOIの規制の在り方を、医療者側から提案していきたい」と抱負が述べられ、シンポジウムは盛会裏に終了した。

とコストの両方にaccountableとなる(=責任を持つ)組織」の意を包含するが、メディケアACOでは、さらに、「プライマリ・ケアを基礎としたケアの統合・継続性」が重視されている。メディケアACOが制度としてスタートしたのは2012年1月であったが、その際連邦政府に認可された全米32の「パイロット」ACOのうち、マサチューセッツ州のサービス供給者が母体となって結成されたACOは5つに上った。厳密に言うと異なる仕組みであるとはいえ、あらかじめブルークロス社からAQCの洗礼を受けていたことが、同州におけるACO立ち上げに寄与したであろうことは想像に難くない。

ブルークロス社によるAQC受け入れ要求、メディケアにおけるACO創設と、マサチューセッツ州において、診療報酬制度改革の流れを加速する事件が立て続けに起こった事情を説明したが、2010年、さらなる激震が同州医療界を揺るがすこととなった。パートナーズ社に次いで州第二の規模を誇る病院グループ、カソリック系のカリタス・クリスティ社が身売りし、「営利」病院チェーンへと変身したのである。(この項つづく)

註1: Global paymentは、「ある患者集団についてあらかじめ支払い総額が決められた包括的支払い方式」であり、厳密に言うところcapitationと同義ではない。

註2: メディケアの場合は出来高払いを受けられるプロバイダがほとんどであり、支出額の「ベンチマーク」との比較で節約分を算定する。

以上、グローブ紙の反パートナーズ・キャンペーンに始まって、ブルーク

「JIM」presents 公開収録シリーズ③

開催のお知らせ

帰してはいけない外来患者 —ジェネラリストの外来戦略

「JIM」では、好評書「帰してはいけない外来患者」の著者である前野哲博先生・松村真司先生と、来春早々に「ジェネラリストのための内科外来マニュアル」の発行を予定している沖縄県立中部病院の金城紀と史先生・金城光代先生をお招きし、幅広い主訴と症状に対応する「ジェネラリストのための外来戦略」をテーマにしたレクチャーおよびケース・ディスカッションを公開収録いたします。

日時: 2013年2月3日(日) 13:30~17:30 (懇親会含む)

会場: 医学書院 本社(東京都文京区本郷)
講師: 金城紀と史氏(沖縄県立中部病院総合内科)
金城光代氏(沖縄県立中部病院総合内科)
前野哲博氏(筑波大学附属病院総合診療科)
松村真司氏(松村医院)

対象: ジェネラリストを目指す医師および医学生

定員: 50名

参加費: 3,000円(懇親会費を含む)

※「JIM」誌を年間購読されている方は無料。優先申込受付あり。

参加申込方法

<「JIM」年間購読者優先申込受付期間>

11月25日(日)正午(昼12時)~12月2日(日)正午(昼12時)

「JIM」誌を個人で年間購読されている方の優先受付期間となります。該当する方のみ受付専用Webサイトからお申し込みください。新規に年間購読申込みをされた方も対象となります。申込方法の詳細は医学書院Webサイト内「JIM」誌のページをご参照ください。なお、受付は先着順で、定員に達し次第終了いたします。

<一般申込受付期間>

12月2日(日)正午(昼12時)~定員に達し次第受付終了。

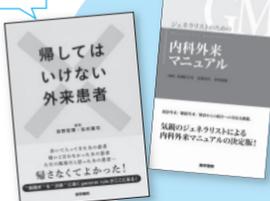
医学書院Webサイト内「JIM」誌のページをご参照ください。どなたでもお申し込みいただけます。受付は先着順で、定員に達し次第、終了いたします。医学書院Webサイトをご参照ください。

お問い合わせ

医学書院 PR部
TEL 03-3817-5696

当日は、先生方のサイン会も予定しております!

2013年2月発行。当日販売予定!



それって本当に風邪ですか?.....

重篤な疾患は風邪にまぎれてやってくる!

誰も教えてくれなかった「風邪」の診かた

重篤な疾患を見極める!

岸田直樹

手稲深仁会病院総合内科/感染症科



プライマリ・ケア現場には、多くの患者が「風邪」を主訴にやってくる。しかし「風邪症状」といっても多彩であり、そこに重篤な疾患が隠れていることは稀ではない。本書では、「風邪」の基本的な診かたから、患者が「風邪症状」を主訴として受診するさまざまな疾患(感染性疾患から非感染性疾患まで)の診かたのコツや当面の治療までを、わかりやすく解説する。新進気鋭の感染症医による「目からうろこ」のスーパーレクチャー。

●A5 頁192 2012年 定価3,360円
(本体3,200円+税5%) [ISBN 978-4-260-01717-6]

医学書院

寄稿

近代医学の145年

『日本近現代医学人名事典【1868-2011】』の人々から

泉 孝英 京都大学名誉教授

今冬、刊行がなかった『日本近現代医学人名事典』は、わが国において西洋医学が公式に採用された1868年(慶応4/明治元年)から2011年(平成23年)までの約145年間に医学・医療に携わり、物故された人物3762人の記録集です。現在、医学領域を網羅しての人名事(辞)典は世にありません。出版史上でも1950年の『世界医学人名辞典』(木下正中著、医学書院、絶版)にさかのぼる程度だと思います。

なぜ、このような書籍を企画したか。医学・医療に限らず、すべての人々の仕事は、先人の業績の上に成り立っているとの前提からです。先人の生き方や想い、その成果を1冊の本にまとめることは、誰かがその次の仕事をなすときに大きな参考になると考えました。本事典の刊行準備が大詰めを迎えた2012年10月、ジョン・ガードン博士(ケンブリッジ大)、山中伸弥教授(京大)のノーベル生理学・医学賞受賞の朗報に接し、ますますその思いを強くしました。

わが国の医学史では、北里柴三郎、志賀潔、あるいは野口英世といった方々の名はよく知られていますが、本稿では、私なりの観点から「長与専斎」「早石実蔵」「花房秀三郎」の3人を通して、本事典が対象としたわが国の近代医学約145年間のあゆみを紹介したいと思います。

長与専斎(1838—1902年)

肥前(長崎県大村市)の漢方医の家に生まれ、大阪で緒方洪庵の適塾塾長を務め、長崎にてポンペ、ボードウィンに学んだ蘭方医でした。維新後、文部省に出仕し、1871年の岩倉使節団に随行して海外の医学教育・医療制度を視察、帰国後、36歳で文部省医務局長に就任しています。厚生労働省のない当時、日本の医療はまず、教育を司る文部省の管轄として始まっています。医療行政が内務省に移管された後も、衛生局長(「衛生」という訳語を採用し、局名改称)として、18年余の長きにわたってその責任者を務めました。わが国の「医療福祉の祖」にあたる人物です¹⁾。

この間、1874年には太政官通達として「医制」(現在も続く医師法・医療制度の根幹)を定め、衛生行政機構、ドイツを範とした医学教育、医師開業免許制度の確立に貢献しました。コレラの死者が1879年、86年にそれぞれ10万人を超えていたことに示されるように、彼が生きたのは急性伝染病対策、未整備な環境衛生対策に迫られた時代でした。

専斎は多くの子息に恵まれ、中でも三男の又郎(病理学者)は東京帝国大学総長になりました。1938年に、荒木貞夫文相から「総長官選案」を示された際は、大学の自治権を守るために戦い、荒木の案を撤回させて自らは総長を辞任しています。2004年に「国立大学法人化案」が、大学人の抵抗少なく実施された当時、私自身はすでに京大を退官した身ではありましたが、又郎の気骨を追想し、悲しくも寂しくも、不安にも感じたことでした。

専斎は多くの子息に恵まれ、中でも三男の又郎(病理学者)は東京帝国大学総長になりました。1938年に、荒木貞夫文相から「総長官選案」を示された際は、大学の自治権を守るために戦い、荒木の案を撤回させて自らは総長を辞任しています。2004年に「国立大学法人化案」が、大学人の抵抗少なく実施された当時、私自身はすでに京大を退官した身ではありましたが、又郎の気骨を追想し、悲しくも寂しくも、不安にも感じたことでした。

早石実蔵(1882—1977年)

明治・大正人の意気軒昂ぶりを示す格好の人物です。彼の時代は、わが国において急性伝染病の猛威が少しは収まり、慢性伝染病である結核、ハンセン病対策に着手されようとする時期でした。また、外科手術が本格化しようとしていました。

実蔵は丹後(京都府宮津市)出身です。上阪して18歳で医術開業試験に及第、7年間宮津で開業の後、27歳で渡米してバルチモア医大で学び、米国各地で外科修業、開業もした後、1922年に渡欧、各国の外科視察の後、ベルリンのコッホ研究所で研究に従事。ドイツ医学雑誌に論文3編を発表しています。さらに米国メイヨー・クリニックを視察した上で帰国。大阪に早石病院を開業しました(写真)。まったく



●早石実蔵氏 (提供:早石修氏)

●写真 1929年7月、大阪船場での早石病院開業時の一枚
自動車後部座席奥が光子夫人、手前が三男の修氏(当時9歳)。

目を見張る努力家でした。その三男は、酸素添加酵素の発見者として知られる早石修先生です(大阪バイオサイエンス研究所理事長、京大名誉教授)。父君の在米中、カリフォルニアで生まれた修先生は、戦後間もない1949年に再渡米され、58年に京大教授に就任のため帰国されています。当時、医学部在学中だった私は、折よく医化学の試験をその前任教授の時期にパスしていたから良かったものの、再試験組になっていた同級生たちは修教授の厳格な口頭試問に遭遇。「ひどい目にあったなあ……」が今も同級生同士の語り草となっていることです。

花房秀三郎(1928—2009年)

戦後のわが国はドイツ医学からアメリカ医学へと大きな転換をしました。高度経済成長に支えられた生活環境の改善と抗生物質・抗菌薬の開発・普及により、伝染病(感染症)は激減し、医療の対策は、成人病・生活習慣病、癌対策の時代となりました。発癌をめぐって癌ウイルスが脚光を浴びた1980年代、世界の医学界から“ノーベル賞に最も近い日本人”と評価されていたのが、兵庫県出身の花房先生です。

私は、1994年に雑誌『最新医学』で連載「海外の日本人——医学・医療」(海外で活躍中の日本人医師24人との対談シリーズ)を企画し、花房先生と対談する機会を得ました。シリーズの目的は、「どうして日本ではノーベル生理学・医学賞の仕事が生まれぬのか」を考えることでした。花房先生は、ラウス肉腫(1911年発見)を用いて「癌ウイルスの持つ遺伝子が正常細胞内に存在する」との発見・報告(1977年)



●花房秀三郎氏 (提供:最新医学社)



●いずみ・たかてる
1936年徳島県生まれ。60年京大医学部卒、65年同大学院修了。同年同大結核研究所附属病院助手、67年米国ロックフェラー大、71年スウェーデン・カロリンスカ病院留学。京大結核胸部疾患研究

研究所助教授を経て、89年京大教授(呼吸器病学)。同大胸部疾患研究所長/附属病院長、米国胸部学会諮問委員、欧州呼吸器学会国際委員を歴任。98年米国胸部学会会長賞受賞。99年退官。現在は公益財団法人京都健康管理研究会・中央診療所理事長として外来診療に従事している。

に至るまでに研究の歩みを淡々と語られました。その際、残念がっておられたのは、ラウス肉腫と同じところに発見され、先生が研究対象にしようとした藤浪・稲本肉腫(1910年発見)が、日本には残っておらず、外国(チェコ)で保存されていたことです。先生の共同研究者であった照子夫人は、「藤浪肉腫を忘れ去った事実の根底には、学問は、欧米の先例を追い、それに頼っていればよいという、科学者の安易な考えもあったことを否定することはできない」という厳しい言葉を残されています²⁾。そうした事実が、わが国の現代医学の背景にあることを忘れてはならないと思います。

*

2012年、わが国からもノーベル生理学・医学賞に値する成果が初めて生まれていたことが、山中教授の受賞によって証明されました。明治初期、30歳前後であった国民の平均寿命は、今や80歳前後と、世界で類を見ない長足で超高齢国家になりました。急ぎ足、と言うのは「ゆがみ」を伴います。解決すべき多くの問題を含んでいます。外国に範を求めた時代は過ぎ、わが国自身が世界に範を示すべき時代が到来しています。

本書の中から、わが国の医学・医療の領域において、それぞれの時代で頑張られた先人たちの志を私たちが見いだし、引き継ぐことができればと思います。

●参考文献

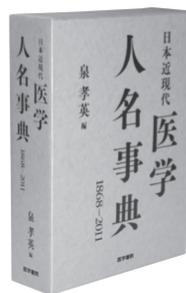
- 1) 外山幹夫『医療福祉の祖 長与専斎』思文閣出版、2002年。
- 2) 花房照子『細胞ががんになるとき——がんウイルスの遺伝子をめぐって』講談社、1978年。

わが国の医学・医療の礎を築いた故人の業績を集大成

編 泉 孝英

京都大学名誉教授/
公益財団法人京都健康管理研究会・中央診療所理事長

明治・大正・昭和・平成の140年間余(1868～2011年)において、わが国の医学・医療の発展に貢献した3,762名(故人)の業績を整理・収録した人名事典。医師、看護師、薬剤師、療法士、検査技師など医療専門職を中心に、著名な患者、社会事業家、出版人など周辺領域で尽力したひとびとも選定した。付録に関連年表・書名索引を収録。



●A5 頁810 2012年
定価12,600円(本体12,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00589-0]

日本近現代
医学
人名事典
1868—2011

まんがでみるわかりやすい医学の通史、堂々の刊行

まんが 医学の歴史

医学の歴史は、人類の誕生とともに始まり、いつの世もらせん状に続いてきた泣き笑いの人間ドラマがあった。世界初! 臨床医であり漫画家である著者による、まんがでみるわかりやすい医学の通史、堂々の刊行。古代の神々からクローン羊のドリーまで、『看護学雑誌』2003-2005年の連載に大幅描き下ろしを加えた。

茨木 保
いばらきレディースクリニック院長



Medical Library 書評新刊案内

《精神科臨床エキスパート》 これからの退院支援・地域移行

水野 雅文 ● 編
野村 総一郎, 中村 純, 青木 省三, 朝田 隆, 水野 雅文 ● シリーズ編集

B5・頁212
定価5,670円(税5%込) 医学書院
ISBN978-4-260-01497-7

評者 羽藤 邦利
代々木の森診療所理事長

本書には、長期入院患者の「退院促進・地域定着支援」の実践報告がたくさん収載されている。精神科病院8施設、精神科診療所2施設、社会福祉法人1施設、就労継続A事業所1施設からの報告である。

大いに共感し、触発される
刺激的な一冊

「退院促進・地域移行」と言うと、厚労省が2003年から始めた「精神障害者退院促進支援事業(精神障害者地域移行・地域定着支援事業)」(通称“退促”事業)を思い浮かべる人が多いと思う。“退促”事業は、社会的入院7万2000人を10年間で解消することを目標に、都道府県ごとに相談事業所(ほとんどが地域活動支援センターを併設)を主な実施主体として取り組まれたものである。2003-09年の7年間では、事業対象者数7903人、退院患者数2825人であった。

実績数は少ない。しかし、数には表せない大きな成果があったと言われている。相談支援事業所の職員が精神科病院に出向き、病院職員と一緒に対象患者に働きかけ、「退院する気がない」患者を退院する気にさせ、退院準備、退院、地域定着に至る。地域定着までには、どのケースも1-2年かかっている。その間、病院、家族、地域の関係者を巻き込んだ波乱万丈のドラマがあったと聞く。“退促”事業を通して、相談支援事業所の職員はとてつ力をつけた。さらに、相談支援事業所を核にして、精神科病院、診療所、保健所、福祉事務所など地域の社会資源のつながりがつくられた。実績数は少なくても、“退促”事業は精神障害者を地域で支える基盤をつくった。

ところで、本書に掲載されている報告は、相談支援事業所などの“退促”事業のことではない。主に精神科病院で行った「退院支援・地域移行」の取り組みである。対象患者は一部重なっていたと思われるが、取り組み主体が違う。

精神科病院の取り組みは10年以上にわたっている例もある。その間、対象患者、その関係者にとってだけでなく、精神科病院にも、波乱万丈の展開が起きている。その中から、病院はたくさんノウハウを蓄積し、機能を飛躍的に高めている。

例えば、デイケアが重要であること、訪問看護の活用の仕方、24時間電話相談が必要であること、退院促進プラン、トータルコーディネート、ケアマネジメントといった手法のこと、チーム医療、全体ミーティング、職員研修、職員の意識改革など。さらに、地域移行加算、退院前訪問指導といった診療報酬のこと。「退院させるにはまず“気合い”だ」といった言葉など、本書に掲載された報告には、退院支援に欠かせない重要なアイデアや工夫が盛り込まれている。その一つひとつが、医療現場で「膨大なエネルギー」を注ぎ込んでいるうちに獲得したものであることが報告からわかる。

特に、この数年余りの取り組みを経て、どの病院も大きく変貌を遂げている。病棟構成や職員構成が様変わりしている。平均在院日数が著減、外来患者数、デイケア患者数、訪問看護件数が著増している。

この本の中ではあまり言及されてい

ウィリアム・オスラー ある臨床医の生涯 WILLIAM OSLER: A Life in Medicine

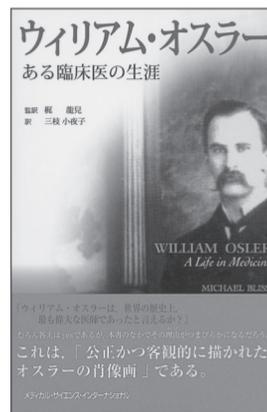
Michael Bliss ● 著
梶 龍児 ● 監訳
三枝小夜子 ● 訳

A5変型・頁620
定価3,780円(税5%込) MEDSI
http://www.medsj.co.jp

評者 井村 裕夫
京大名誉教授

ウィリアム・オスラーといえば19世紀末からの現代医学の黎明期に、臨床医学者、医学教育の改革者、医の倫理の伝道者として国際的に活躍し、多くの医師・医学者の尊敬を集めた偉大な存在である。オスラーが現在も多くの人々の尊敬を集め、インスピレーションを与え続けていることは、オスラー協会があり、彼の著書が広く読まれていることを見ても明らかである。しかしオスラーといえども人間で、欠点や失敗があったはずであるから、その実像を明らかにしたいという意図の下に書かれたのが本書である。著者のマイケル・ブリスはかつて「インスリン物語」を著し、インスリン発見にかかわる通説を破ったことで知られており、私もその本を読んで感銘を受けたことを今も明瞭に覚えている。

ウィリアム・オスラーの
等身大の実像を求めた伝記



ブリスの手法は多くの文献、記録、手紙などを丹念に読んで、もつれた糸

をほぐすように真実に迫ろうとするものである。本書でも実に多くの資料が引用されていて、読みごたえがある。しかも文章は平易で——この点はオスラーの文章と異なるが——、かなり大部の書であるが一気に読み通すことができる。それでは結論はどうであろうか。もちろんオスラーにも多くの失敗や問題点があったことは事実であるし、良い意味での野心家の一面があったかもしれない。しかし彼の人生は気高く堂々としていて、今も多くのの人々の本心からの崇拝を集めているという一事に、その人生が凝縮されているように思われる。

オスラーが亡くなって80年以上経ち、医学は科学の一分野として大きく変貌した。しかしそうした時代であればこそ、時にはオスラーの原点に戻って患者、病氣、そして医学の思想・倫理に思いをはせることが必要ではなからうか。

ないが、精神科病院は「退院支援・地域移行」と並行して、救急病棟や認知症病棟の強化拡充を進めていた。「退院促進・地域移行」とそれらが重なり合って精神科病院は様変わりしたと考えられる。しかし、もし最初に「退院支援・地域移行」に取り組まなければ、これほどの様変わりは起きなかったのではない。「退院支援・地域移行」が最近の精神科病院の改革の起爆剤だったのは間違いない。

コミュニティメンタルヘルスセンターになり得る”とある。また、小規模の診療所の報告では「入院と地域支援の間の断層」を埋める役割を担えること、保健師などとチームを組むことで良い効果が生まれることが指摘されている。今後、精神科診療所は地域の中で重要な役を担うのではないだろうか。この本からは現場の息づかいが聞こえてくる。現場に身を置いている者でないと書けない“本音”が満載である。大いに共感し、触発される。たくさんのヒントをもらえるが、少しばかり反発を感じる部分もあって、とても刺激的である。この本は面白い。

◎軽快にして圧巻の見出し語数。
グローバル時代の全医療者に贈る用語辞典の決定版!

医学書院 医学用語辞典

英和・略語・和英

監修 伊藤正男 理化学研究所脳科学総合研究センター特別顧問
井村裕夫 京大名誉教授
高久史磨 日本医学会会長

学会準拠の日本語・欧文表記、略語をすばやく調べられるよう、高い信頼性で定評のある『医学書院 医学大辞典 第2版』収載の用語に最新医学用語を加え、ポケットサイズにまとめた英和・和英辞典。総見出し語数は圧巻の14万語。どこにでも軽快に持ち運べ、論文執筆・閲覧に、WEB検索などに、機動的に使える。

●B6 頁992 2012年 定価4,410円(本体4,200円+税5%)
[ISBN978-4-260-00364-3]

医学書院 医学大辞典 第2版

総編集 伊藤正男・井村裕夫・高久史磨
解説項目5万2000の群を抜く情報量と信頼性。情報化時代に頼りになる医学大辞典、最新版
●A5 頁3560 2009年 定価18,900円(本体18,000円+税5%) [ISBN978-4-260-00582-1]

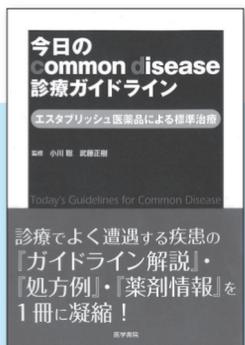
医学書院

ガイドライン解説・処方例・薬剤情報を1冊に凝縮!

今日の common disease 診療ガイドライン

エスタブリッシュ医薬品による標準治療

監修 小川 聡 国際医療福祉大学三田病院・院長
武藤正樹 国際医療福祉大学大学院・教授



common disease59疾患の『ガイドライン解説』と『処方例』、処方薬の基本情報を『薬剤一覧』にまとめた、全医療従事者必携のクイック・リファレンスブック。各疾患解説中の「処方例」と巻末の「薬剤一覧」は、相互参照できるユニークな構成となっている。本書では、エビデンスに基づく診療ガイドラインに収載されるような標準的治療薬で、しかも費用対効果の優れた医薬品を「エスタブリッシュ医薬品」と位置づけ、それらの薬剤を中心にとりあげた。common disease情報のアップデートに、患者説明・服薬指導に、薬剤銘柄選択に…あらゆるシチュエーションにおいて、多忙な現場をサポートする1冊。

●B6 頁480 2012年
定価4,725円
(本体4,500円+税5%)
[ISBN978-4-260-01525-7]

医学書院

『週刊医学界新聞』 通常号索引

2012年1月—12月（2959号—3008号）

ニュース・ルポ

- ◇日本発!! ブレイン・マシン・インターフェース新時代 BMIの新技術で、難治性神経疾患・脳機能障害に光を………2959
- ◇第12回日本クリニカルバス学会………2961
- ◇医療事故・紛争対応研究会第6回年次カンファレンス………2961
- ◇「いきいき百歳体操」の健康戦略………2963
- ◇都道府県のがん対策推進を考える………2963
- ◇第17回白壁賞、第36回村上記念「胃と腸」賞授賞式………2967
- ◇「大規模災害と障害者支援」セミナー………2969
- ◇第39回日本集中治療医学会………2971
- ◇金原一郎記念医学医療振興財団贈呈式………2971
- ◇第76回日本循環器学会………2974
- ◇厚生労働省関連の国家試験合格状況………2978
- ◇第55回日本糖尿病学会………2980
- ◇STROKE2012………2980
- ◇第98回日本消化器病学会………2980
- ◇第47回日本理化学療法学会………2982
- ◇第23回「理化学療法ジャーナル賞」………2982
- ◇第108回日本精神神経学会………2982
- ◇第13回日本語聴覚学会………2984
- ◇第34回日本血栓止血学会………2984
- ◇第17回日本緩和医療学会………2986
- ◇第46回日本作業療法学会………2986
- ◇第54回日本老年医学会………2988
- ◇第10回日本臨床腫瘍学会………2990
- ◇第1回TRENDカンファレンスから………2990
- ◇第3回日本プライマリ・ケア連合学会………2996
- ◇日本の医療と『週刊医学界新聞』の60年 3000
- ◇第50回日本癌治療学会………3004
- ◇金原一郎記念医学医療振興財団贈呈式………3004
- ◇第20回総合リハビリテーション賞授賞式 3004
- ◇第40回日本救急医学会………3006
- ◇第36回日本死の臨床研究会………3006
- ◇第7回医療の質・安全学会………3008
- ◇臨床・教育現場における利益相反を考える………3008

対談・座談会・インタビュー

- ◇BMIが、医療の新領域を拓いていく(吉峰俊樹, 川光光男, 里宇明元, 佐倉統)………2959
- ◇SHD インターベンション 心臓への新たな低侵襲治療「TAVI」の可能性(古田見)………2961
- ◇「胃と腸」歴代編集委員長の「私の一冊」(八尾恒良, 多田正大, 牛尾恭輔, 飯田三雄, 芳野純治, 松井敏幸)………2961
- ◇堀川俊一氏に聞く(堀川俊一, 猪飼周平) 2963
- ◇卓越した教材としての『幻聴妄想かるた』(新澤克憲, 武井麻子, 小宮敬子)………2963
- ◇有害事象発生時の適切な対応とは(高橋長裕, 前田正一, 児玉聡)………2965
- ◇チームで挑む慢性心不全診療(佐藤幸人, 横山広行, 多留ちえみ, 宮澤靖)………2967
- ◇災害医療2.0(里見進, 森野一真, 石井正, 山内聡)………2969
- ◇ICTで実現する、新たな「日本の医療」(小倉真治, 田中博, 神野正博)………2971
- ◇皮膚疾患診療のこれからは展望する(塩原哲夫, 宮地良樹)………2972
- ◇日本の医療費を見つめ直す(加藤治文, 長瀬隆英)………2974
- ◇高齢者糖尿病のマネジメント(横野浩一, 荒木厚, 櫻井孝)………2976
- ◇双極性障害を「識る」(秋山剛, 尾崎紀夫, 加藤忠史)………2978
- ◇後ろ向きでいいじゃない(平川克美, 六車由実, 大野更紗)………2982
- ◇C型肝炎治療の新展開(熊田博光, 豊田成司, 茶山一彰, 菅原通子)………2984
- ◇がん患者さんの「働きたい」思いをかなえる就労支援とは(高橋都, 近藤明美, 金谷杏, 和田耕治)………2988

- ◇チンパンジーと私たち(松沢哲郎, 瀬戸嗣郎)………2994
- ◇未破脳動脈瘤の自然歴の悉皆調査(森田明夫)………2994
- ◇消化器外科の新地平をひらく(森正樹, 宮崎勝, 桑野博行, 渡邊聡明)………2996
- ◇うつ病診療の「均てん化」へ(神庭重信) 2998
- ◇変容する社会とパーソナリティ障害のかたち(牛島定信, 斎藤環)………2998
- ◇日野原重明氏に聞く………3000
- ◇小児終末期の治療方針を考える(加部一彦) 3002
- ◇「JCI」に学ぶ、これからの病院医療(福井次矢, 落合慈之, 夏目隆史)………3004

寄稿・投稿・視点

- ◇新春随想 2012(門田守人, 寺岡慧, 辻哲夫, 色平哲郎, 楠木重範, 坂本すが, 藤田郁代, 中板育美, 山浦文嗣)………2959
- ◇「食べること」をあきらめない(川口美喜子) 2961
- ◇直感的診断の可能性(志水太郎, 松本謙太郎, 徳田安春)………2965
- ◇東日本大震災被災者の健康調査から見えてくること(坂田清美)………2969
- ◇格差社会で行動する英国の一般医(武田裕子)………2972
- ◇適正に臨床試験を実施できる医師を養成するために(小林真一)………2974
- ◇男性糖尿病患者の性機能障害を支援する看護の現状(村岡知美)………2976
- ◇「生きたい人」を支えられない、医療・福祉の運用現場(森川すいめい)………2978
- ◇抗菌薬適正使用を推進する Big gun project(荒川創一)………2980
- ◇心臓救急最前線(伊藤賢敏)………2986
- ◇自殺は予防できるのか(高橋祥友)………2986
- ◇在宅ケアのルネサンス——Buurtzorg(堀田聡子)………2986
- ◇コーディネートされた認知症ケア——Geriant(堀田聡子)………2988
- ◇現代的重症患者診療(讀井将満)………2990
- ◇家庭医療による病院再建と米国式外来への変革(本田宜久)………2990
- ◇急性期脳梗塞治療の新時代(山上宏)………2990
- ◇「Lifelong Learner」としての町医者「の心得」(福井謙, 小田倉弘典, 牧瀬洋一, 亀井三博, 伊藤伸介, 藤原靖士)………2992
- ◇機器を利用した認知症の生活支援(安田清) 2992
- ◇End-Of-Life Care Teamによる意思決定支援の取り組み(西川満則)………2996
- ◇ジェネラリストによるロンドン五輪奮闘記(小林裕幸)………2998
- ◇私と医学界新聞(高久史磨, 矢崎義雄, 井村裕夫, 伊藤正男, 金澤一郎, 南裕子, 黒川清, 川島みどり, 李啓亮, 河合忠, 井部俊子) 3000
- ◇日本発の新たな疾患概念 IgG4 関連疾患の潮流(神澤輝実)………3002
- ◇私と医学界新聞(武藤徹一郎, 岩崎榮, 奈良勲, 矢谷令子, 藤田郁代)………3002
- ◇見知らぬ世界へのどこでもドア(金川英雄) 3002
- ◇「第三次坂の上の雲」としての医療イノベーション(野元正弘)………3004
- ◇「ごちゃまぜ」で医療・介護に顔の見える関係をつくろう(吉村学)………3006
- ◇地域医療たかまモデル(井階友貴)………3006
- ◇近代医学の145年(泉孝英)………3008

連載

- ◇在宅医療モノ語り(鶴岡優子)
 - ②長押さん…2961, ③聴診器さん…2965, ④お茶さん…2969, ⑤お菓子さん…2972, ⑥メジャーさん…2976, ⑦タオルさん…2980, ⑧口紅さん…2984, ⑨日草さん…2988, ⑩靴べらさん…2992, ⑪印鑑さん…2996, ⑫舌圧子さん…3002, ⑬洗浄ボトルさん…3006

- ◇続 アメリカ医療の光と影(李啓亮)
 - ⑩ウォルマートのビジネス・ディジション…2961, ⑪生殖医療と政治…2963, ⑫予防接種拒否をめぐる倫理論争…2965, ⑬セラピューティック・タッチ…2967, ⑭「ピンクリボン」コーメン財団の失敗…2969, ⑮医師が患者になるとき…2971, ⑯医師が殺人罪に問われた理由…2972, ⑰半世紀後のピル論争…2974, ⑱医療制度改革法違憲訴訟…2976, ⑳砂糖規制運動…2978, ㉑「医療債務」という名の陥穽(1)…2980, (2)…2982, ㉒病院チェーン「乗っ取り」をめぐる攻防…2984, ㉓学業成績向上薬…2986, ㉔「肥満は自己責任」論の不毛…2988, ㉕オバマケア合憲判決の「想定外」(1)…2990, (2)…2992, (3)…2994, ㉖「最先端」医療費抑制策マサチューセッツ州の試み(1)…2996, (2)…2998, (3)…3002, (4)…3004, (5)…3006, (6)…3008

- ◇老年医学のエッセンス(大蔵暢)
 - ⑬老衰終末期における代理決定…2961, ⑭虚弱高齢者と入院関連機能障害…2965, ⑮もうひとつの最先端医療多職種チームアプローチ…2969, ⑯死に方の科学…2972, ⑰虚弱高齢者の薬物療法…2976, ⑱思想としての老年医学…2980
- ◇今日から使える医療統計学講座(新谷歩)
 - ⑨感度・特異度…2963, ⑩グラフの読み方・使い方…2967, ⑪同等性・非劣性の解析…2971, ⑫ Kaplan-Meier 曲線…2974
- ◇PHOTO LETTER
 - ①続くソマリアの人道危機…2982, ②南スーダン共和国、独立から1年…2986, ③マラリアがまん延するコンゴ…2990, ④薬剤耐性結核が深刻化するアルメニア…2994, ⑤治療・予防の両面から栄養失調に取り組む…2998, ⑥命にかかわる病気、はしか…3004

レジデント号索引

ニュース・ルポ

- ◇若手ジェネラリスト全国80大学行脚プロジェクト………2960
- ◇自治医大「Free course-student doctor」制度 2964
- ◇第106回医師国家試験合格発表………2973
- ◇WONCA 前会長・Chris van Weel氏講演会開催………2973
- ◇がん医療の次世代リーダーをめぐって………2973
- ◇第30回臨床研修研究会開催………2977
- ◇ACP日本支部総会開催………2977
- ◇「みちのく総合診療医学センター」設立記念式典開催………2977
- ◇医学書院「JIMセミナー」のようから………2985
- ◇第44回日本医学教育学会開催………2993
- ◇第18回白壁賞、第37回村上記念「胃と腸」賞授賞式………3001

対談・座談会・インタビュー

- ◇初期診療能力を身につけよう(田中和豊) 2960
- ◇外来研修の意義と学び方(松村真司, 前野哲博, 小曾根早知子, 山田康博)………2964
- ◇「回復の物語」を紡ぐ(藤沼康樹, 柳浩太郎)………2968
- ◇100年目のレヴィ小体研究(中野今治, 河村満, 水野美邦)………2973
- ◇みちのくの地でジェネラリストを育てる(千葉大, 菅智史, 佐々木隆徳, 山田哲也) 2981
- ◇選んだ道を悔やまない。覚悟を決めて、頂点をめざせ!!(天野篤, 竹原朋宏)………2985
- ◇研修医リスクマネジメント心得(田中まゆみ)………2985
- ◇臨床実習の明日を見つめて(奈良信雄, 前野哲博)………2989
- ◇医療の質「カイゼン」を始めよう!!(長谷川耕平, 飯村傑)………2993
- ◇どうなる? 専門医制度(池田康夫)………2997
- ◇診断の神様と外来診療を語る(ローレンス・ティアニー, 金城紀与史, 金城光代, 岸田直樹) 3001
- ◇今こそ学びたい! サバイラの身体診察(須藤博, 徳田安春)………3005

寄稿・投稿・視点

- ◇In My Resident Life(青木真, 蘆野吉和, 兼本浩祐, 箕輪良行, 徳田安春, 片岡仁美, 岡田唯男)………2960
- ◇集まれ! 熱帯医学を志す医師たち(谷口智宏)………2968
- ◇FAQ 不整脈診療の基本(小林義典)………2973
- ◇他職種より愛を込めて 院内を駆け回るための18の「Tips」(杉山良子, 政田幹夫, 脇田紀子, 大塚喜人, 吉岡宏介, 大松尚子)………2977
- ◇変わりゆく米国卒後研修(島田悠一)………2977
- ◇できるレジデントになろう!!(横林賢一) 2981
- ◇外科医のノンテクニカルスキル(円谷彰) 2989
- ◇学生有志による看護職サポート——三重県取り組み(江角悠太)………2993

- ◇ピンチはチャンスに変えられる!(塚原知樹)………2993
- ◇米国ではどのように臨床研修の質を維持しているのか(成相宏樹)………2997
- ◇緩和ケア医をめざす若手医師の未来(西智弘)………2997
- ◇私と医学界新聞(勝俣範之, 伴信太郎, 箕輪良行, 岡田正人, 青木真, 松村真司)………3001
- ◇Kan-fed 勉強会デリバリーシステム(朴澤憲和, 片岡裕貴, 佐田竜一)………3005

連載

- ◇ノエル先生と考える日本の医学教育(ゴードン・ノエル, 大滝純司, 松村真司)
 - ②ワーク・ライフ・バランス(7)…2960, (番外編)…2964, ③新しい医学教育のパラダイム(1)…2968, (2)…2973, (3)…2977, (4)…2981
- ◇循環器に必要なことはすべて心電図で学んだ(香坂俊)
 - ②なぜ、不整脈は起こるのか?…2960, ③安定狭心症はどれだけ「安定」しているか?(前編)…2964, (後編)…2968, ④心電図診断のコツとは?…2973
- ◇それで大丈夫? ERに潜む落とし穴(志賀隆)
 - ② COPD 急性増悪…2960, ③過換気症候群…2964, ④アナフィラキシー…2968
- ◇REAL HOSPITALIST(石山貴章)
 - ③総合内科の面白さ…2960, ④ホスピタリストユニットとトヨタカイゼン方式…2964, ⑤「情熱」と「ビジョン」…2968
- ◇学ぼう!! 検査の使い分け(高木康隆)
 - ①腫瘍マーカー…2960, ②梅毒検査…2964, ③微生物検査…2968
- ◇もう膠原病は怖くない! 臨床医が知っておくべき膠原病診療のポイント(高田和生)
 - ⑧シェーグレン症候群/多発性筋炎・皮膚筋炎…2960, ⑨全身性強皮症…2964, ⑩結合組織病/血管炎…2968, ⑪膠原病診療におけるステロイド…2973, ⑫膠原病診療における免疫抑制治療…2977
- ◇臨床研修ええとこどり!! around the world(水野篤)
 - ①韓国編…2964, ②台湾編…2968, ③フランス編…2973, ④英国編…2977
- ◇外来診療の一手(前野哲博)
 - ①昨日から3回も吐いてしまいました…2973, ②急に腰が痛くなって…2977, ③今朝からめまいがするんです…2981, ④最近、体重が減ってしまって…2985, ⑤気を失ってしまったんだよ…2989, ⑥下腹部が痛いんです…2993, ⑦最近、歩きづらんです…2997, ⑧急に背中が痛くなって…3001, ⑨風邪をひいたみたいで…3005
- ◇「型」が身につくカルテの書き方(佐藤健太)
 - ①「型なし」、あるいは「型通り」から「型破り」へ…2985, ②カルテ記載の基本の型 SOAP(1)…2989, (2)…2993, (3)…2997, ⑤病棟編(1)…3001, (2)…3005

50人の先輩医師にきいてみよう

あなたへの医師キャリアガイダンス

研修病院選びの決め手は何か、専門を何にするか、臨床か研究か、留学や開業をいつするか……。医師としてのキャリアの積みかたは多様だ。本書では50人の先輩医師が「今のあなたの悩みについて、かつて(あるいは現在進行形で)同じように悩み、このような道を選んだ」と、本音で語る。執筆陣は聖路加国際病院内科の現役・OB/OGという共通点はあるものの経歴は多様多様。さまざまな努力や転機となったエピソードが興味深い。

編集 岡田 定
聖路加国際病院内科チェアマン
堀之内秀仁
国立がん研究センター中央病院呼吸器内科
藤井健夫
聖路加国際病院腫瘍内科



本当に欲しい情報、使えるTIPS

がん化学療法 レジメン管理マニュアル

がん化学療法を安全に行うために、臨床現場に必要な情報をレジメンごとにまとめたマニュアル。支持療法を含めた投与スケジュール表と副作用の発現時期を提示し、エビデンスに基づいた減量規定、中止規定を記載。臨床現場で重要な副作用を取り上げ、その対策を解説した。具体的な介入事例(CASEと解説)も収載!

監修 濱 敏弘
がん研有明病院薬剤部長
編集 青山 剛
がん研有明病院薬剤部
東加奈子
東京医科大学病院薬剤部
川上和宜
がん研有明病院薬剤部主任
宮田広樹
日本医科大学付属病院薬剤部



Medical Finder

電子ジャーナル 無料体験キャンペーン実施中!

実施期間

2012年11月5日(月)～
2013年1月6日(日)

ぜひお試しを!!

左記期間中、ご希望の雑誌の2003年ないし2004年から2009年発行分までのバックナンバーをweb上でご覧いただけます。

弊社発行の雑誌をオンラインで読んでみませんか?
上記の期間限定で電子ジャーナルを無料でお試しいただけるキャンペーンを実施いたします。この機会にぜひともお試しください!

手順

- ①上記期間内に医学書院webサイト(<http://www.igaku-shoin.co.jp/>)にアクセスします。
- ②画面中央の「お知らせ」に表示されている「電子ジャーナル無料体験キャンペーン実施中!」をクリックします。
- ③画面の表示にしたがって必要事項を記入後、自動返信されるメールの記載されたURLからログインします。

詳しくは <http://www.igaku-shoin.co.jp/>

日本の医療を創った「対話」と「革新」の軌跡



日野原重明 ダイアログ

「週刊医学界新聞」に掲載された日野原重明氏の講演・インタビュー・対談・座談会などから11本を厳選し書籍化。医学教育、プライマリ・ケア、POS、緩和医療など、医学界の発展は日野原氏の革新の精神とともにあった。

【対談者】

武見太郎、阿部正和、柴田 進、J.Fry、小林 登、紀伊國献三、川上 武、R. G. Twycross、B. M. Mount、植村研一、L.L.Weed、森忠三、片田節子、児玉安司、阿部俊子、福井次矢、川島みどり

●A5 頁264 2012年 定価2,310円(本体2,200円+税5%)
[ISBN 978-4-260-01706-0]

待望の第2弾。ティアニー氏厳選144パール!



ティアニー先生の ベスト・パール

著 ローレンス・ティアニー
カリフォルニア大学サンフランシスコ校内科学教授

訳 松村正巳
金沢大学医学教育研究センター准教授、
リウマチ・膠原病内科

「診断の神様」と賞賛されるティアニー氏は、臨床の知を短いフレーズにまとめた「クリニカル・パール」の神様としても知られる。絶賛された前作に続く本書では、循環器疾患や消化器疾患から眼科、耳鼻咽喉科、精神科まで、一般診療医が遭遇しうる幅広い領域にわたり、とっておきのクリニカル・パールを選んでいただいた。日々の診療、日々の臨床研修に刺激を与えてくれる待望のパール・ブック第2弾。

●A5 頁186 2012年 定価2,625円(本体2,500円+税5%)
[ISBN978-4-260-01712-1]

2013年1月発行の医学雑誌特集テーマ一覧

冊子版および電子版等の年間購読料につきましては、医学書院ホームページをご覧ください。下記定価は冊子版の一部定価、消費税5%を含んだ表示です。

医学書院発行

公衆衛生	2月号 Vol.77 No.2 一部定価2,520円	歯科口腔保健を巡る話題	臨床外科	2月号 Vol.68 No.2 一部定価2,730円	術後の血管系合併症 —その診断と対策
medicina	1月号 Vol.50 No.1 一部定価2,625円	進化し続ける内科診療 —世界が認めたブレイクスルー	臨床眼科	1月号 Vol.67 No.1 一部定価2,940円	新しい緑内障手術
JIM	1月号 Vol.23 No.1 一部定価2,310円	[2大特集] 2023年のプライマリ・ケアを夢想する—新世代の挑戦 被災地のプライマリ・ケア復興に向けて	耳鼻咽喉科・頭頸部外科	2月号 Vol.85 No.2 一部定価2,730円	ここまでできる外来手術
糖尿病診療マスター	1月号増大 Vol.11 No.1 特別定価3,780円	糖尿病治療薬アップデート —最近の進歩を知る	臨床泌尿器科	2月号 Vol.67 No.2 一部定価2,940円	泌尿器科の未来を拓くバイオ技術
呼吸と循環	2月号 Vol.61 No.2 一部定価2,835円	特発性間質性肺炎を見直す —特発性間質性肺炎臨床の最新知見	総合リハビリテーション	1月号 Vol.41 No.1 一部定価2,310円	発達障害のリハビリテーション
胃と腸	1月号 Vol.48 No.1 一部定価3,150円	潰瘍合併早期胃癌の 診断と治療	理学療法ジャーナル	1月号 Vol.47 No.1 一部定価1,890円	脳のシステム障害と理学療法
BRAIN and NERVE	1月号 Vol.65 No.1 一部定価2,835円	Corticobasal Syndrome	臨床検査	2月号 Vol.57 No.2 一部定価2,310円	血管超音波検査/ 血液形態検査の標準化
			病院	1月号 Vol.72 No.1 一部定価3,045円	病院の評価—課題とこれから



医学書院

〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23 [販売部] TEL: 03-3817-5657 FAX: 03-3815-7804
E-mail: sd@igaku-shoin.co.jp http://www.igaku-shoin.co.jp 振替: 00170-9-96693